

社員だった関係で兵隊にならず満鉄社員となり、昭和十九年十月に帰国していました。

河南作戦に病魔とも闘う

宮城県 松川 章 吾

六十有余年を経て、記憶も朧げな手にペンを執り、有りし日の戦跡を辿る。

想い起こせば、昭和十六（一九四一）年八月、二俣、飯野川、大谷地の合同徴兵検査が、中心地の飯野川実科女学校を会場として実施されました。その時は町の「中之茶屋」と言う旅館で規律正しい一泊二日の団体生活でした。

その際、簡単な筆記試験が実施され、審査の結果、成績優秀をもって、時の連隊区司令官東海林大佐殿より賞詞を賜わり喜んでいた所、小学校卒業にしては出来過ぎていると問題視されました。しかし調査の結果、その疑いが晴れてホッとしました。

想い出が頭に浮かびます。

体格については自慢できないので、諦めていた通り第一乙種合格となり、肩身の狭い思いで召集令状の来るのを一日千秋の思いで待ちました。待つこと久し、昭和十七年八月「赤紙」が来ました。ようやく一人前として認められたことが、昨日のこのように脳裡に焼き付いています。

出征当時の我が家は、国策の「生めよ殖やせよ」で兄弟姉妹十一人の長男に生まれました。部落には同じような家が四家族ありました。わが家は、その上財産もなく、借地住まいで、その日暮らしの日雇い家業で、文字通り「赤貧洗うが如し」の諺通りで、私の長雇い（一年中住み付いて働く）で生計を助けていました。このため後顧の憂いはあるものの親類や銃後の方々に後事を託し、近くの河川敷堤防の広場において部落を挙げたの壮行会を開催して頂きました。

阿部二俣村長様（私の長雇い主）よりのご祝辞

と激励のご挨拶を賜わり、それに応えて私は人前で話す機会が無かったので緊張し、無我夢中でお礼と「皇国に尽忠の誠を捧げて来ます」と覚悟の程を申し述べました。万歳や歓呼の声に送られて最寄りの国鉄鹿又駅目指して大勢の人々の行列と共に行きました。唯一人私のための見送りに感謝し、再びまみえる事のできないであろう山河をしばし車窓より眺め感無量でした。

父は福島県郡山駅まで見送るとのことと同乗しましたが、これまで二人共働きづくめで、旅に出ることも無かったので、父と別れてからどのようにして乗り継ぐのか分からなかったのですが、多少の予備知識が役立つ、「指令」通りに東部第十二部隊（第九連隊）第三中隊（隊長小林貞治大尉）に無事入隊、陸軍二等兵となりました。

体格が貧弱でしたから通信、駄馬隊の教育ではほめられたり叱られたりで、ビンタを喰うのが日常茶飯時のことでした。

初年兵としての内務班と教練の厳しかった三ヶ月間の生活にも慣れ、一期検閲もアツと言う間に終了した十一月二十日、支那派遣のため金沢連隊を出発、列車にて門司港に、直ちに輸送船にて釜山港に向かう。海上無事、上陸後列車にて鮮満国境經由、徐州、南京、杭州と戦争を経験した事のない我々にとっては、大陸の広大さに驚嘆しながらの旅行気分を満喫し、昭和十八年一月一日、駐屯地の安華省にある中支派遣「原」第四六二九部隊独立混成第二連隊到着しました。

この部隊の編成は歩兵十二個中隊、砲兵、騎兵、輜重兵各一個中隊で、部隊長は門間健太郎大佐、中隊長は中尾捨吉でした。二月十日、私は一等兵に進級と同じに砲兵大尉指揮の下に、蘇淮作戦参加し、揚州を經由して宝応車橋鎮に至りました。

この作戦において、塚田一等兵（現役）は頭部貫通銃創にて名譽の戦死を遂げました。遺体は民

家に安置し、夜間は敵に発見されるので、昼間民家に火を放ち茶毘に付し、皆で冥福を祈り、遺骨を胸に抱いて戦鬪を繰り返しながら安華の部隊に帰りました。

五月二十日、安徽省芦州駐屯の「月」部隊が南方ニューギニアに派遣のため第六十五師団が編成され、独立歩兵第一三五大隊長竹下少佐、第三中隊長金井中尉に編成替えとなりました。

八月十二日、上等兵に進級と同時に、師団衛兵隊要員として「専」第七九九〇部隊に派遣されました。師団長は太田米雄中将、高級副官米丸正熊、衛兵隊長余語大三大尉の下での勤務でした。

昭和十九年二月十日、警備員のみ残留し河南作戦に出動しました。何の手違いなのか広野を行ったり来たり、さ迷ううちに食糧も欠乏し、民家へ押し入り薩摩芋の乾燥した物を掠奪し、皆で分け合って飢えを凌いだこともありました。明けても暮れても行軍の毎日に急に右下肢が痛み出し、我

慢していたが遂に耐えきれず、徐州「登」第一六一五部隊（野戦病院）に入院を余儀なくされました。病床にあって兵長に進級したとの報告を受けました。

その中に湿性肋膜炎を併発しました。異郷にあっての病院生活では故郷に想いを馳せ、心細さを感じみ感じさせられました。思いの外、早く全快し、二月二十八日に退院命令が出た日は今でも心に残っております。

三月二十五日、衛兵隊の任務遂行は無理と判断され、原隊復帰命令が出ました。昭和二十年九月一日に伍長に任官、終戦となり、在留邦人を送還する主要幹線鉄道の安全を確保するため鉄道警備の任に当たりました。そのため武器はそのまま貸与となりました。

昭和二十一年四月二十三日、警備任務を終え、復員のため海州に集結、さらに五月二十八日連雲港に集結、六月二十三日、同地において米軍によ

る武装解除を受け身も心も軽くなりました。

七月二十九日、内地帰還のため連雲港より上陸用舟艇の船底にすし詰め状態にされ出港しました。海上も無事に何事もなく、八月三十日、夢にまで見た内地佐世保港に上陸、各種の検疫やDDTを体中に吹きかけられ、所持品の検査等も済み、復員列車に乗り込み、それぞれの想いを乗せて家族の待つ故郷を目指してひた走りました。

途中、車窓より眺めた東京の市街地の爆撃の凄まじさは目を覆うばかりで、焼野原と化した惨状の路上において、米兵が住民の乗っていた自転車を奪い取り、潰している様子を目撃しました。この瞬間、これからの日本は大変なことになると直感しました。

こうした長旅でも、いろいろな光景を眺めたり、想像したりする間に東北本線の乗り換え、終着駅小牛田に到着しました。真夜中なので石巻線への接続列車がなかったので駅員さんをお願いして駅構内で戦友と二人で携帯していた毛布を被り

一夜を明かし、翌朝一番列車に乗り、再び見る事のできないと思っていた鹿又駅に一步を踏み出した時は、何とも言い表すことのできない心境でした。

家までの道程も足が地に着かない程の軽さで、アツと言う間に我が家に到着、軍隊口調で「只今帰りました」と声を掛け玄関の戸を開けると、父母、隣所の方々も啞然としてしばらく声も出なかった有様で、しばらくして「よかった、よかった」と大喜びで迎えて頂きました。

父は次男なので、独立して多くの子供を育てるのが精いっぱい、戦後は食糧難や諸物資の無いづくしで大変だったと思います。しかし働くことに生き甲斐を見つけ幸せに恵まれました。私も近所より縁があって妻を迎える事ができ、五人の子宝に恵まれ、今は長男夫婦と同居し、孫二人と家族円満に余生を送る事ができるのも、故郷を見る事のできないまま海外において散華し、尊い

国の礎となった多くの戦友達のお蔭と感謝しながら、戦友のご冥福をお祈りしております。

このような幸せを壊すいかなる名目の戦争も避けるべきであり、あの悲惨さを次の世代に経験させてはならない、語り継ぐべきであると痛感しております。

中国大陸・北辺から

南支まで幾千里

香川県 石井康一

私は大正十二（一九二三）年八月十七日生まれます。家族は両親の下に姉弟八人、全部で十人の大家族で、その中で私は長男で四番目の子でした。家は農業を営み、約一町歩ほどの耕作をしていました。近隣では大百姓と言われていたようでした。

ご承知と存じますが、瀬戸内海は九十九島（多

島美）で、小豆島は淡路島を除いて一番大きい島（三カ町ある）です。数多くの島々は永年の風雨波浪に耐えた松林や、岩頭に根を張って頑張ってる古木は樹齢幾百年、その生き様は私達日本人の誇りと言うか、心を打ち、一幅の絵のごとくです。

また、四国八十八カ所の霊場巡拝には数十日も掛けて全国より多くの人達が巡礼されます。わが小豆島には島四国と申しまして八十八カ所の霊場があり、数日で一巡できます。昔より摂津、播州、備前や遠く山陰方面からも多くの参拝巡礼者が来られました。皆様他人に親切で人情味豊かです。私は良き国、佳き人達に接しながら成長しました。

ただ残念なことは父親が若くして不帰の客となったことです。私が小学校を卒業し、さらに進学すべく勉強していた矢先のことでした。家庭状態を思う時に、僅か十五歳の少年でも、私は「俺は長男だ」と自覚しました。農耕は大変重労働で